

第1回世界ほしいも大会の概要

一般財団法人いも類振興会 理事長

かりや 狩谷
あきお 昭男

第1回世界ほしいも大会inひたちなかは、一般財団法人ほしいも学校の主催で2016年3月5～6日に、茨城県ひたちなか市のホテルクリスタルパレスで開催された。約350名の参加者があった。ほしいも大会のうち、シンポジウムを主体にその概要を紹介する。

1. トークイベント

「ほしいもを通して世界を見る」をテーマに、地域エコノミストの藻谷浩介氏とグラフィックデザイナーである佐藤卓氏との対談が行われた。干しいもをめぐる新たな知見や振興を図る視点・発想に関する情報・提案は少なく、期待に反し印象の薄い対談であった。

2. パネルディスカッション

佐藤卓氏の進行で、干しいも生産者4名のパネラーによる「干しいも生産の現状と未来について」の討論が行われた。その主な発言要旨は、次のとおりである。

大塚 裕樹 有限会社大塚ファーム 代表取締役

札幌市まで35kmに位置する新篠津村で、有機野菜農業を実践してきた。10年前からサツマイモ栽培も始めた。しかし、北海道ではサツマイモの人气がなく売れなかつ

た。当初、妻が自家製の干しいもを子供に食べさせたことがきっかけとなり2009年から、干しいも製造に取り組む。使用品種は「タマユタカ」、「パープルスイートロード」、「シルクスweet」、「コガネセンガン」、「ベニアズマ」、「べにはるか」、「安納紅」である。栽培期間が短いため、収量は不安定である。干しいも作りでは、気候的にみて天日乾燥は難しく機械乾燥だ。北海道で干しいもを製造している者は3～4軒にすぎない。ホクレンのバイヤーから、「干しいもは北海道らしさがないと駄目だ」と言われた。そこで、干しいもを30～40日間雪の中で貯蔵し、「有機雪中干し甘いも」の名称で、品種名、生産者の顔写真も入れ販売している。今後は犬・猫用の干しいもも販売していきたい。

安 知明 ほしいも工房かけみや 代表取締役
茨城県で「タマユタカ」を作っていたがシロタが出るので、5年前から「べにはるか」に絞って生産している。県内では現在、「タマユタカ」が減少し、「べにはるか」が増加している。干しいもの味の違いは何によるものなのか、嗜好品でもあるのでわかりにくい。干しいもが100年前に静岡県から茨城県に伝播してきたことに思いを馳せ、地域連携を強化していきたい。

関谷 夕佳 株式会社おいもや 代表取締役

静岡県では「タマユタカ」が栽培されておらず、これまで主流であった「泉13号」から「べにはるか」が多くなり逆転した。静岡県内の干しいも生産量は減少傾向にあり、干しいも関係者の連携活動も弱く、今後とも増加は厳しいようだ。干しいもの味は、土壌などによっても異なる。消費者の嗜好を見極めて、干しいもをブランド化することが大切で、軟らかい“半生干しいも”も販売している。今後、東京・丸の内勤務のビジネスマンでも、バックに干しいもを入れていても恥ずかしくないよう、干しいもに対する評価を高めていきたい。

井上 憲郎 JAあおぞら販売加工課 課長

干しいも用の「べにはるか」は組合員の農家が生産し、平成26年12月からJAあおぞらで干しいもの製造施設を整備して製造を開始し、機械乾燥で仕上げている。干しいも作りでは、原料いもの貯蔵が重要であると認識している。県外では“安納いも”で作った干しいももあるが、鹿児島県には干しいもを食べる習慣がなかったので苦戦している。今後は、学校や幼稚園から消費拡大を目指したい。鹿児島県での干しいもの普及は厳しいが、夏場は干しいもを冷たくし、冬場は温めて食べるようにすれば道が開けると考えている。茨城県では、干しいも生産者とJAなどが一体となって振興を図っているの、鹿児島県もこれを見習い干しいも生産を盛り上げていきたい。

3. 干しいも産地の発表会

(1) 干しいもの紙芝居

静岡県の御前崎には、大澤権右衛門の“いもじいさん”と栗林庄造の“干しいもじい

さん”がいる。この2人の功績を、「御前崎いも物語」と題して、御前崎ふるさと案内人の曾根竹男氏が紙芝居で紹介した。

(2) 伊勢志摩のきんこ

40年前から“きんこ”を製造している上田商店の橘 麻衣氏から、「きんこの今とこれからについて」紹介された。煮切干であるきんこは、主として海女のおやつであった。三重県伊勢志摩地方は温暖な気候であったために、水分の多いきんこ作りはカビの発生や腐敗に悩まされていた。昭和55年に父はカビ防止策としてある施設を考案した。その結果、きんこの量産が可能となった。現在、きんこ200gを税込み価格1,080円で売っている。創意工夫を重ね、きんこを油で揚げたチップス、いも蜜シロップ、いも蜜ロールも作って販売している。きんこの今後については、きんこ業界も後継者不足状況にあるので、まずは子供たちにきんこ作りを体験させていきたい。

(3) 世界の干しいも事情

韓国のイ・ヨンジャ、中国の封冬梅、タンザニアのジョン・F・カンボナの各氏から、自国の干しいも事情について、それぞれ簡単な紹介があった。世界の干しいも事情については、一般財団法人いも類振興会から2016年中に発刊予定の『干しいも事典』で詳しく解説しているので、紹介された内容を省略する。

今回の世界干しいも大会は、イベント内容に新規性や国際性・専門性を欠き、名前負けの感は否めなかった。とは言え、新企画で主催者・地元関係者の熱意も高く参加者が多かったの、高く評価したい。